

The Cambridge English School

—Cambridge 大学英文学科（学部）の人間と研究をめぐって—(2)

‘Q’ 登場

英米文学教室 岡 村 俊 明

—なぜ‘Q’か？—

なぜ‘Q’こと Sir Arthur Quiller-Couch をここで取り上げるのだろうか。Cambridge English School (ケンブリッジ大学英文学科(英文学部))²の人間と研究をめぐっての私の研究の一環として、‘Q’は同英文学科の実質的な初代欽定教授 (King Edward VII Professor) であるため、当時の英文学科を代表する ex officio (職権上) の人物として‘Q’を取り上げたことが第一の理由である。しかしそれ以外の理由もある。

‘Q’は79歳の誕生日を迎えた時(1943年)、半ば冗談、半ば回りの人々の意識を代弁したかたちで、自らのことを“a period piece, but yet not a museum piece”³と言ったが、それから50年近い歳月がたっている。英文学研究の著しい発展をみている昨今にあって、50年近い歳月というものは、偉大な学者をも忘却の彼方へ突き放す力というものを持っている。現在では Cambridge にあっても、‘Q’はほとんど語られなくなってきている。遠く離れた日本においては、‘Q’は「時代物」以上の古さとなっているかも知れない。‘Q’は多くの著作を著したが、その多くのものは絶版となっており、現在でも版を重ねているものはそれほど多くない。それゆえ歴史的遺産としてのみ‘Q’を取り上げるならいざしらず、現代の日本英文学研究にインパクトを与える存在として現代的意義を問うことになると、‘Q’の存在に疑問とする方々も多いのではなからうか。そう自認した‘Q’の79歳の誕生日の約20年前に、即ち、時代も激しく変わり、Cambridge の英文学研究も著しく進展していった1920年代にあって、‘Q’自身及び彼の愛弟子 Basil Willey が既に、

The truth is that ‘Q’ outlived his own world, which—to adopt a remark of his own—was really dead by about 1925, though this was not generally known at the time.⁴

と言っている。このとき既に‘Q’は過去の人間となっていたのであろうか。しかし‘Q’の著作及び人間としての生き方を考察してみると、‘Q’は文学研究の過度の専門化にたいして、現代にも通じる貴重な警鐘を鳴らしていたと思われてならない。20年代、30年代にあって、‘Q’は良い意味のディレクターの研究を目指していたのではなからうか。‘Q’のこの基本的な態度は現代においてこそ忘れてはならないものと思われる。これこそ‘Q’を取り上げた本質的な理由である。以下項目別に分けて、‘Q’の生涯、小説、批評・研究、評価等について考察をしたい。

第一章 'Q'⁵ (Sir Arthur Quiller-Couch) の生涯

この章では F. Brittain (Cambridge 大学 Jesus College のフェロウ) 著 *Arthur Quiller-Couch — A Biographical Study of Q* (Cambridge University Press, 1947) をもとに 'Q' の生涯について考察したい。

Jonathan Couch は Cornwall 州 Polperro の開業医であり、妻 Jane との間に男 5 人、女 1 人の 6 人の子供をもうけた。その長男がここで取り扱う Arthur Thomas Quiller Couch (1889 年までは Quiller-Couch とハイフオンを付けていなかったが) である。彼は 1863 年 11 月 21 日に出生した。男の子のうち 3 人は父と同じく医者となるが、'Q' は早くから文学の才能があり、兄弟とは違う方向に進むこととなった。

学齢期になると、'Q' は新設のパブリック・スクールである Newton Abbot College に入学し、7 年間そこに在学する。'Q' の友人である Walter Shaw Sparrow によれば、その学校は

'Newton was not at all snobbish, but her atmosphere was like that of one of the very private schools which are called public; indeed, she was a *new* public school, and eager to make a name in sports, games, scholarship, and professions.'

であった。その学校で彼は貪欲にギリシア語、ラテン語を学んだ。また "was never in a hurry and never ill-tempered."⁸ と後年の 'Q' の特質となったものが既にこの時代に形成されていたことが分かる。その後、'Q' は奨学金を得るため Bristol にあるパブリック・スクールの名門 Clifton College に転校し、2 年間在学する。在学中に詩を書き、校友誌 *The Clifton* に度々発表した。また Athens をテーマとした詩では特別表彰 ("school prize") を受けた。卒業後 (1882 年) 奨学金を得て、Oxford 大学 Trinity College に入学。専攻は古典学 (Classics) である。'Q' は学生時代に広く読書をし、機知とユーモアに富んだ会話を楽しみ、良き友人を作ることができた。また彼は *The Oxford Magazine* の編集業務を手伝う。その雑誌に度々寄稿したことが、'Q' の在学中の特記事項であろうか。ともかく 'Q' は学問ばかりでなく、スポーツにも熱心で、ボート部にも所属 ("Trinity first boat") し、大いに活躍していた。このように、スポーツにも学問にも励むという態度を 'Q' は終生持ち続けたといえよう。1886 年 'Q' は卒業試験を受けた。結果は、予想に反して第二級 (second class) の成績だったことは、彼にとって大きな失望だった。このため Trinity College の講師 (lecturer) とはなかったが、彼が望んでいたフェロウになれる見込みは将来ともないと判断したようである。このため、'Q' は Virgil や Aristophanes の講義をしつつも、創作に力をいれ初め、1887 年最初の小説 *Dead Man's Rock* の出版にこぎつけ、その書評が出る頃には、学究生活を断念し、作家として立ってゆく決心をした。

'Q' は 1887 年 London に転居する。作家として名声を得るには London が最も適した場所だと判断したからであろう。しかし小説家として食っていくのは勿論容易ではない。そのため彼は出版社 Cassell's と契約を結び数多くの文を寄稿した。この頃 'Q' は Louisa Amelia Hicks に出会い、1889 年には Cornwall 州 Fowey の教会で彼女と結婚した。'Q' の 25 歳の時である。この結婚は 'Q' にとって終生大きな意味を持った。妻 Louisa もさることながら、彼女が住んでいた Fowey が 'Q' に決定的な意味を与えたのである。というのは彼は、そのころ極度の神経衰弱にかかり、そのため London を去り、

閑静な Fowey に転居するからである。Oxford 大学時代の友人によれば、“a nervous fear of crowds amounting even to shrinking from crossing the street.”⁹ほどに神経衰弱になっており、London には住めなくなっていたといえる。また Cambridge 大学教授となっても、'Q' は長期休暇が始まるとすぐ Fowey へと帰り、Fowey でも種々の公務についていたからである。

Fowey では港と海を見下ろす高台の *The Haven* という家に一家は長年住むこととなった。Fowey に住み初めて 'Q' の健康も徐々に回復してゆく。転居して最初の 7 年間に雑誌 *The Speaker* に定期的に寄稿し、それらをまとめて *Adventures in Criticism* として出版したり、また多くの小説を書き、本の編集に関係したりもした。冒険とヒューマーを特色とする小説や性格を見事に描き出す小説を書いてゆく。この頃の彼の関心は、仕事、創作、批評のほかにはボートやヨットなどであった。'Q' は “Fowey Yacht Club” のメンバーとなり、後にはクラブの会長となった。

1901年から12年のあいだの12年間は 'Q' にとって最も実り多い年月であったといえよう。その期間に出版されたものには、*The Oxford Book of English Verse*, *The Oxford Book of Ballads* 及び *The Oxford Book of Victorian Verse* 等がある。特に *The Oxford Book of English Verse* は出版当初から評判が良く、文学者としての 'Q' の名声を確立したものと言える。彼はこの期間に他に13編の小説を書き、子供向けの本の編集等にたずさわった。以前に書いた(1899年)子供向けの *Historical Tales from Shakespeare* とともに、'Q' の子供に対する関心の強さはその後も続いてゆく。この種の仕事ばかりでなく、'Q' は Fowey 及び Cornwall 州の教育界などでも多くの貢献をした。政界進出に対する友人の忠告もあったが、'Q' はあくまで文芸活動を中心に据えた。自分の性格にあった最も良い生き方は文学だとの自覚があったと思われる。そういう 'Q' の文学、教育、政治活動への貢献に対して、1910年に George V により Knight の称号を授与された。このことは 'Q' の種々の貢献が、特に文学関係の仕事が世間で十分に認められたということの意味する。そんな頃 Cambridge 大学の英文科にとって重要な出来事があった。1910年に、Sir Harold Harmsworth は Cambridge 大学に20,000ポンド寄贈し、そのため英文学欽定教授職が創設されたことである。初代教授は Cambridge 大学 Trinity College のフェロウであった有名な古典学研究者 Arthur Verrall が選ばれたが、彼は病身のため1年後に死去し、そのため後任探しが始まった。1911年その後任として、幾多の候補者の中から Sir Arthur Quiller-Couch が選ばれたのである。この人事は Cambridge の人達を少なからず驚かせた。なぜなら 'Q' は著名人ではあったが、着実に厳密な研究活動を積んだ著名な学者ではなかったからであり、また 'Q' の専門は古典学であったからである。その教授ポストは Herbert Grierson が有力となっていた。彼は John Donne の著作の校訂を終え、厳密な本文校訂を基盤とした学者・批評家として有名であったからである。この間の事情を Tillyard は次のように述べている。

Asquith, then Prime Minister, had decided that he was the man for that chair. The matter was as good as settled, when Lloyd George got busy and said they ought to make a party appointment. Quiller-Couch had been keeping Liberalism going in Cornwall for many years and Lloyd George knew *The Oxford Book of English Verse*. Asquith yielded to Lloyd George's pressure, and Quiller-Couch was offered the chair.¹⁰

当時の首相 Asquith が先行して決めたが、彼は Lloyd George の意を体して決定したようである。このようにして 'Q' は教授職の申し出を受けたのである。

'Q' は Cambridge 大学英文学教授として就任し、その後世界的に著名な学者・批評家となるが、

‘Q’は実作者としての経験と幅広い読書に支えられた文学愛好者としての態度を決して失わず、それを文学研究の領域に持ち込んだのである。また英文学研究に古典学をも重視したのは、学生時代に古典学を専攻し、古典学こそ優れた学問との認識ばかりでなく、特に Cambridge 大学教授として、古典学の素養が周囲からも期待されていたことにもよる。のちに F. R. Leavis¹¹などにより、‘Q’は古典学を過度に重視しているという批判を受けるが、当時としては自然な研究態度であったというべきである。むしろ、‘Q’は古典学に対して硬直した意見を持たず、自由な批判を許す土壌を作ったことで記憶されてもよい。Tillyard は

In this matter of liberalism Q gave a genuine lead. Indeed the rest of us were in this simply reinforcing what Q had been preaching ever since he was professor. My own brand of liberalism grew out of my disappointment with the kind of Classics I had been subjected to as an undergraduate, with the lack there of any freedom to have opinions on classical literature. Remembering this disappointment still vividly I was a whole-hearted supporter of Q's general way of thinking.¹²

と述べているように、‘Q’は“liberalism”を持論としており、その伝統は今も Cambridge English の大きい特色となっている。

‘Q’が Cambridge 大学英文学教授に就任して、家族は Cambridge に移り住むことになったが、長期休暇には Fowey に帰り、そのまま家族は Fowey に定住することとなったため、‘Q’はフェロウとなった Jesus College で宿泊と食事をする事となり、長期休暇にはいるや、家族が待つ Fowey にそそくさと帰って行った。このような生活を81才で死去するまで続ける。これに対して Tillyard は次のように書いている。

Q's home was in Fowey in Cornwall and he spent most of the year there, coming into residence at Cambridge about a fortnight after the beginning of Full Term and leaving about a week before the end. He once went so far as to cut the final meeting of Tripos examiners when the lists are ceremoniously signed, and in substitution for his presence posted his signature on a piece of stamp-edging: an act which provoked a new university ordinance rulling that every examiner shall be present at the signing of the lists.¹³

これは相当に厳しい評価というべきであろう。Mansfield Forbes の伝記作者 Hugh Carey¹⁴や、M. C. Bradbrook¹⁵も同じ主旨の事を述べている。こういう非難はあったが、教授就任後の研究・批評活動はまことに活発となる。‘Q’は最初に（1916年）*On the Art of Writing* を出版する。これは大学の講義録をほとんどそのまま出版したものである。1920年に出版する *On the Art of Reading* とともに、これは研究者・批評家としての ‘Q’ を最もよく表し、この両書によって Cambridge English の一つの伝統を築いたものである。この両書については後ほど詳しく述べたい。

Cambridge 大学教授として、大学における行政面で ‘Q’ が果たした仕事はどのようなものであったのか。Brittain は非常に好意的だが、同じ英文科の講師 (lecturer) であった Tillyard の評価は次の通りである。

And when it comes to his office as Professor—an office not purely social—I cannot pretend that he held it with unbroken diligence.¹⁶

結局、'Q' は教授として果たすべき役割を十分に果たしていないという意味にとって良からう。それにもかかわらず、'Q' が全然行政に無関心であったとは私には思えない。Cambridge English のこの当時の目標は英語独自の Tripos を成立させることであり、'Q' もその努力はしていた。'Q' はアングロ・サクソン語教授 H. M. Chadwick とともに、Modern Languages Tripos の一セクションであった英語を、次のような観点から改正することを望んだ。

They felt that the English syllabus needed widening and modernizing, that English should be more of a humane study than it had been, and that candidates should also be to sit for an examination in literature without being forced (at they then were) to be examined also in philology.¹⁷

1918年にこの案は、Cambridge 大学評議会を通過し、英語は English Tripos として独自に認定されることとなった。この改正の重要な点は次の四つである。一つは語学の必修を全廃したこと、二つは語学の代わりに文化・文明史を導入し、古代研究 (early studies) のオリエンテーションを設けたこと、三つは「中世」が占める割合を極めて少なくしたこと、四つは近代英文学研究を古代英語から遠ざけ、それをヨーロッパ大陸、特に古代ギリシア・ローマ研究と深く関連づけたことである¹⁸。こういう改正に対して、'Q' が著作等を通じて常々主張していた二つの主要な点—文化・文明史導入及び英文学研究を古代ギリシア・ローマ研究と関連させたこと—は、'Q' が貢献したものといえよう。

English Tripos 制定でほっと一息ついたものの、その翌年 'Q' に個人的不幸が襲った。1919年息子の Bevil の死去である。このため 'Q' は家族の絆を一層強く感じ、辞職を真剣に考えた。しかし辞職は思いとどまり、ますます多くの仕事を引き受け、それによって苦悩を紛らわそうとした。従って、このころの著作活動は、250巻に及ぶ *The King's Treasuries of Literature* の編集責任の仕事及び J. D. Wilson と共同で *The New Shakespeare* の編集と多彩を極める。Shakespeare に対する関心はこのころが最も旺盛で、'Q' は1921年 British Empire Shakespeare Society の Cambridge 支部設立に指導的役割も果たした。

English Tripos をさらに改正する動きがでてきた。この改正で(1926年)'Q' が強く主張した“English Moralists”が English Tripos の一科目として認められた。'Q' については手厳しい批判を加える Tillyard もその意義を次のように強調している。

But the real surprise was the paper on the English Moralists. It was a success from the beginning, and for two main reasons. First it turned out that a substantial number of undergraduates were, in their third year, at the exact point of intellectual development for Hobbes or Locke or Berkeley or Bentham to make the maximum impact. Moreover, it was a relief to them to turn from pure literature to writers who, though men of letters also, were primarily thinkers. Secondly, we had in Basil Willey a teacher who was more interested in the substance of the Moralists paper than in any other part of the English syllabus. One can say that Willey made the Moralists paper and that the Moralists paper

made him. He at once became indispensable to the English staff, and it was only a matter of a vacancy for him soon to become a University Lecturer. In saying this I do not forget Q. If Willey made the paper in one sense, without Q it would not have been begotten. Q's most tangible service to the Cambridge English School was in being the only begetter of the paper on the English Moralists. And when you consider the scanty support he enjoyed and the great opposition he suffered, that service was no mean thing.¹⁹

今日に至るも“English Moralists”は Cambridge English School で生きている。

English Tripos 改正前後、'Q' は出版活動においても多忙を極める。1923年から33年の間に 'Q' が出版したものは、二冊の研究書、一冊の散文のアンソロジー、三冊の子供向け聖書のアンソロジー、彼自信の小説30巻の改訂版の出版及び友人・知己等の出版物に対する数多い序文の執筆である。この時期だけで普通の人々の10倍にも及ぶ仕事量をこなしているといえよう。上に述べた研究書の一つは *Charles Dickens and Other Victorians* で、これは彼が大学の講義録に基づいて出版したものである。このように出版を念頭において講義をして、二度と同じ内容の講義をしないのが 'Q' の特色である。散文のアンソロジーとは1925年出版の *The Oxford Book of English Prose* である。このころ彼の視力は急速に衰えて多くの書物を読むことが困難になってきたため、'Q' は Newham College 出身の Winifred Hutchinson の援助をまってこのアンソロジーの仕事を押し進めた。これは散文のアンソロジーとしては決定版となり、今日に至るも版を重ねている。彼はアンソロジーには深い関心を示し、同じ頃に (1924年) Cambridge 大学から *The Children's Bible* と *The Little Children's Bible* を出版した。宗教の新しい教授細目に基づいて編集されたもので、Cambridge 州の学校の授業に使用されたものである。'Q' は絶えず子供に強い関心を示していたが、これは注目に値する。既述した児童用文学全集 *The King's Treasuries of Literature* にしても、主要研究書である *The Art of Writing* 及び *The Art of Reading* にしても、子供を文学に導入させる方法に彼は関心を持っていたのである。

1933年頃になるとさしもの 'Q' にも衰えが目だって来るようになる。「ひどくもうろくした」(“I am a certifiable old man now.”)²⁰と自ら述べるが、その“certifiable”とは単なる冗談以上の意味を持っている。そのため、1933年には30年間勤めていた Cornwall 州の教育委員 (The Cornwall Educational Committee) の職を辞任し、また同じく同州の参事会員 (alderman) の地位も辞任した。しかし Fowey では地安判事 (magistrate) の任務は引続き勤めた。1937年には、驚くことに、'Q' が Fowey の市長 (mayor of Fowey) に選出されたのである。これに対して伝記作者 Brittain は何等コメントを加えていない。これは二つの理由により私には驚きである。一つは、'Q' の体力の衰えが目だっており、しかも1937年とは74才という高齢であること。二つは、Cambridge 大学教授を勤め、遠く離れた Fowey の市長を兼務することである。非難はあったとはいえ、重要な職務を兼務できるほど良くも悪くも牧歌的な時代であったのであろうか。

'Q' はいつまで市長の職務を続けていたのか、Brittain の伝記を見る限り分からないが、ともかく 'Q' の健康は持ちこたえたようで、彼は79才になってもまだ現役の教授であり続けた。その年の誕生日には、老齡を相当に意識して、“a period piece, but not yet a museum-piece”²¹と半ば自嘲混じりに 'Q' は言っている。

'Q' が1943年80才の誕生日を迎えたときには、彼は「文学界の長老」(“doyen of English men of letters”)²²として、新聞、雑誌等で各界から賛辞を送られた。そして翌1944年、'Q' は Cambridge で

死去した。その日の 'Q' の生活は次のようである。

朝食後、妻に手紙を書いた。結婚生活54年というもの離れている間欠かさず書いていたものである。それから他の手紙を書き、それから昼食まで研究を続けた²³

不断の生活とはまったく変わらないものである。'Q' は死後も多くの人々に記憶されるだろうと Britain は次のように述べている。訳出して引用したい。

彼を個人的に知っている人は、個性に富んだ人、ユーモアを欠かさない人、話上手な人、客をもてなす名人、難儀している人々を助ける人として彼を思い出すことだろう。もっと広い世間の人々は、「小説家として、批評家として、選集編者として人々の心の中に英文学に対する生き生きとした愛情の炎をともした」見事で、簡素な散文の書き手として彼の事を思い出すだろう。また彼は偉大なコーンウォールの人間として記憶されることだろう²⁴。

第二章 'Q' の小説 (*The Astonishing History of Troy Town*) について

'Q' の創作活動は多彩を極める。Oxford を去り、London に出て創作活動に力をいれ始めた経緯は既述した。彼は出版者 Cassel's に文章を寄稿しながら、最初の小説 *Dead Man's Rock* を書き上げ、1887年にそれを出版する。翌年にも第二作を出版する。それがここで取り上げる *The Astonishing History of Troy Town* である (以下 *Troy Town* と略記)。父親の死後、父の残した借財の返済をしたり、肉親を扶養しながら、'Q' は次々と小説を書き続け、文章を雑誌に寄稿する。Cambridge 大学教授に就任する1912年までに、彼は19の作品を発表していることから、この頃の多作ぶりが理解されよう。作品と出版年度は以下の通りである。

- 1887年 *Dead Man's Rock*
- 1888年 *The Astonishing History of Troy Town*
- 1890年 *The Splendid Spur*
- 1891年 *The Blue Pavilions*
- 1896年 *Ia*
- 1899年 *The Ship of Stars*
- 1902年 *The Westcotes*
- 1903年 *The Adventures of Harry Revel*
- 1904年 *Fort Amity*
- 1905年 *Shining Ferry*
- 1906年 *Sir John Constantine, The Mayor of Troy*
- 1907年 *Poison Island, Mayor Vigoureux*
- 1909年 *True Tilda*
- 1910年 *Lady Good-for-Nothing*
- 1911年 *Brother Copas*
- 1912年 *Hocken and Hunken, a Tale of Troy*

1915年 *Nicky-Nan, Reservist*

1918年 *Foe-Farrell*

このように多くの小説の中から特に *Troy Town* を選んで考察したい理由は、その出版1年後に 'Q' は Miss Louisa Amelia Hicks と Fowey の教会で結婚するが、まもなく彼は過労から極度の神経衰弱となり、ついに London から Fowey に転居し、Fowey が彼の永住の地となり、そしてこの Fowey をモデルにして *Troy Town* を書き上げたからである。また数多い彼の作品は絶版となったが、この *Troy Town* は J. M. Dent 出版社100周年を記念して出版された作品ともなった。従って、彼の人となりを含めて創作の特質を考える際の格好の材料となろう。

*Troy Town*²⁵の粗筋を追いながらコメントを加えてゆきたい。

小説の舞台は Troy Town で、中心人物は Admiral Buzza 一家 (Buzza 海軍将官とその妻 Emily, 三人の娘 Sophia, Jane, Calypso と息子 Sam) と海軍将官の二人の妹 Limpenny (Priscilla と Lavinia) である。煉瓦運びの Caleb, Caleb が仕える隠遁志願者 Fogo, 税官吏にして詩人 Mogridge は脇役とでも言えようか。

この小説は "Any news tonight!" で始まる。場所は Limpenny の客間。客は兄 Buzza 夫妻、そして牧師。彼らはトランプ遊びを楽しみながら、話題を捜している。退屈な田舎町の退屈な人々という印象である。そんな彼らが日頃考えていることは "Cumeelfo" である。

Yet we were vastly genteel. We even had our shibboleth, a verdict to be passed before anything could hope for toleration in Troy. The word to be pronounced was 'CUMEELFO', and all that was not Cumeelfo was Anathema.

So often did I hear this word from Miss Limpenny's lip that I grew in time to clothe it with awful meaning. It meant to me, as nearly as I can explain, 'All things Sanctioned by the Principles of the Great Exhibition of 1851', and included as time went on— (p. 10)

ここに書かれた "Cumeelfo" は明白なようで、なんとも曖昧である。それは「1851年の大英博覧会の諸原理によって容認され、時の推移とともに包含されるすべてのもの」と定義されるが、なんともはっきりしない。ともかく、大英帝国の繁栄と人類の進歩を意味するものようであるし、大英帝国の正当的なものの考え方及び人々を意味するようでもある。

彼らが会話を楽しんでいるとき、「あずまや」 ("the Bower") に借主が見つかったというニュースが飛び込んでくる。借主は貴族である The Honourable Goodwyn-Sandys 夫妻である。このニュースに一同は沸き立つ。その兄が Sinkport 男爵であることが「紳士録」を調べて分かったからでもある。

その翌日に彼らは到着することになっており、そのため次の日は早朝から Troy の町は騒然となった。

Next morning, almost before the sun was up, all Troy was in possession of the news; and in Troy all that is personal has a public interest. It is this local spirit that marks off the Troyan from all other minds. (p. 14)

上の表現から、運命共同体とでも言うべき Troy の町とその人々のありさまがよく理解される。海軍将官 Buzza は着飾り、ボタン穴に花も差し、汽車の駅に出迎えに行く。しかし、到着した人は Goodwyn-Sandys 夫妻ではなく、この町を隠遁の場と決めてやってきた Fogo であった。人々から離れて住みたいと思っていた Fogo にとっては、この町のこのような騒ぎは心外なことであった。しかし面目を失ったのは海軍将官であるというべきである。彼は赤面する。この困難な状況に解決を与えたのが市民の発した

'What day es et?'

'Fust of April' (p. 20)

であり、結局 4 月馬鹿ということで決着をみた。深刻な状況はこのような軽口で緩和されている。Goodwyn-Sandys 夫妻はその日に、誰にも迎えられずに馬車で到着した。同じ日に Goodwyn-Sandys 夫妻と Fogo という異なった階級、性格の人々がなにか一つ事件の起こらない Troy の町に到着する。対照をなすものの提示と意外な進展という手法の導入は、Goodwyn-Sandys 夫妻に対する(または "Cumeelfo" に対する)盲目的な尊敬を示す Troy の人々の愚かな態度を明らかにしている作者特有の手法というべきであろう。これからはこの二組の人々を巻き込んで話が進展して行く。

海軍将官は帰宅するや恥辱のあまりすぐ床につく。そのときの表現

The Admiral undressed, and, himself a warming-pan of rage, plunged between the sheets.
It was a wonder the bed-clothes were not on fire. (p. 25)

は、意識的におおぎょうに書かれており、軽口の表現と共に作者のヒューマナーのセンスが現れている、と見るべきであろう。

一方、隠遁を求めてこの町にきた Fogo が適当な住処をさがしもとめていると港で煉瓦運びの Caleb に出会う。二人は意気投合し、そのため Caleb は Fogo に仕えることに決め、以後彼は主人思いの召使としての面目を遺憾なく発揮する。二人は住むべき場所を、Troy の町から離れたところを見つけようとする。彼らが目を付けた家は "Kit's House" (「子猫の家」) である。木立に囲まれ、幽霊屋敷という異名もついている空き家である。ハンセン病患者が住んだところとも伝えられている。その患者にある乙女が恋をして、二人はそこに隠れて、幸せに暮らしたという話も伝わっている。その家とその周辺について Caleb は次のように述べる。

"T'es a luvly spot, as you said, sir. Mr Moggridge down at the customs—he's poet, as maybe you know—has written a mint o' verses about this 'ere place, "Natur'", he says;—

Natur' has 'ere assoomed her softest garb;

'Ere would I live an' die

—which I calls a very touchin' sentiment, an' like what they says in a nigger song.' (p. 31)

方言を交えながら語る Caleb の自然描写は、まことに生き生きとしており、牧歌的な、現実遊離とも思えるこの場所にずっとした現実感を与えており、しかもこの港町に対する語り手の強い愛情をも表しているといえよう。二人は、そこで持ち主の双子の兄弟と彼らが溺愛し貴婦人に育てよ

うと思っている Tamsin に出会う。彼らは暖かい兄弟愛にあふれている。

次は、散歩に出かける Goodwyn-Sandys 夫妻に話が移る。屋根に上がって望遠鏡で彼らを盗み見している人がいる。Limpenny である。しかし彼女以外にも望遠鏡を持った人が現れる。その現れ方はコミカルに描かれている。

Slowly, very slowly, the rival telescope was tilted up against the harbour-wall; very slowly it rose in air. Then came a pair of hands—of blue cuffs—and then—the crimson face of Admiral Buzza soared into view, like the child's head in *Macbeth*. (p. 45)

先ほどの失敗にも懲りず現れいでたのは海軍将官 Buzza である。彼の顔は *Macbeth* に登場する子供の顔(*Macbeth* 4 幕 1 場の洞窟の中の亡霊の子供と思われる)と比較されている。ともかく、Shakespeare をはじめとして、Wordsworth, Coleridge や古代ギリシア・ローマの文学に対する言及が目につく。その Buzza は今度は屋根から落ちるのだ。彼は威厳を取り繕って、しかも失策をする男として描かれている。それでも Buzza は Goodwyn-Sandys 夫妻を正々堂々と訪問することを決心する。彼は娘たちを引き連れて、月曜日の朝訪問する。

Again the great man was in full dress. Behind him in Indian file advanced Sophia, Jane, Calypso. . . . (p. 51)

少し大げさな表現であろう。こういう時は、一種のペイソスが予想される。即ち、盛装をした Buzza と三人の娘たちとは対照的に、訪問を受ける側の主人は朝起きたばかりで、髭を剃っていたのである。彼は訪問客の声を聞いて、剃刀を滑らせ顔を切ってしまった。そんな時にも Buzza はまことにきちんとした訪問の意図を告げる。ここで盛装した人と不意を食らった朝起きたばかりの人の対照とその出会いが描かれている。Buzza は Troy の町では選りすぐった最上の人々との認識があり、その範ちゅうで行動すべきだという強い観念を持っている。最後に Buzza は

By the way, how is Lord Sinkport? I really forget to ask. Quite well? I am so glad. (p. 57)

と言う。質問をし、あいずちか何かを受けて、彼は納得したのであろう。このなんの変哲もない上の引用が実はやがて重大な意味を持つに至る。というのは Lord Sinkport の実弟であるはずの Goodwyn-Sandys は実は偽者なのである。このことは後ほどはっきりする。

Buzza は今度“Kit's House”を訪問する。貴族であれ誰であれ新しい住人に対して訪問することは義務と考えているからである。川浴いの“Kit's House”へは船に乗って訪問しなければならない。彼は今度も三人娘を連れて堂々と行く。Jane と Calpso にはオールを持たせ、Calpso はへさきに乗せ、彼は提督らしく三角帽をかぶっている。既に何度か見てきたように彼が堂々と威儀を整えて行動すると何かそれを打ち消すような事が起る。間が悪いことにその日は“Kit's House”の洗濯日であった。召使となった Caleb は主人 Fogo とともに下着を洗っていた。その時の表現は面白い。

At the sound Mr Fogo raised his spectacles and blandly stared through them at the strangers. Caleb started, turned suddenly round, and came rushing down the beach, his right

hand frantically waving them back, his left grasping a pair of—(Oh! Miss Limpenny!)
 'Hi? You must go back. Go away, I tell'ee?' he gesticulated.
 'What on—'
 'Go away; no femeles allowed here. Off with'ee this moment!'
 'Put down those—s, Sir' yelled the Admiral. (p. 59)

下着などの言葉は注意深く省略されている。ディセンシイに反するからであろう。これを見て、娘三人を連れていた Buzza は驚き、そのはずみにポートから落ちる。またもへまをしでかしたのだ。なんとか家にたどり着いたが、Buzza は妻に "Troy has laughed at me again. Put me to bed." (P. 67) としよげきって、またも床につく始末だ。なにかを威風堂々とやろうとして、失敗するというパターンは彼にいつも付きまといている。しかもそのことの詳細は父親を弁護する立場にある息子 Sam が、弁護どころかパブで言い広めたものだから、それは Troy の町中の噂となる。Buzza 一家は実に個性ある人間と言えよう。それほど事件のないのんびりとした町でもあることも分かる。Buzza はその後約一週間悶々としていた。その間の様子は繰り返しの多い文体を用いて描かれている。

On Tuesday he was strangely softened and quiet; but
 On Wednesday he recovered, and began to bully his wife as fiercely as ever.
 On Thursday he broke the bell-rope again. . . ,
 On Friday. . . .
 On Saturday. . . .
 On Sunday. . . .
 On Monday. . . (p. 68)

こういう手法はここ以外でも見られる (P. 70)。作者特有の手法と言うべきであろう。

一方、牧歌的な、なに一つ変化のなきようなこの町にも変化が起き初めていることが了解される。税関吏で詩人の Moggridge は詩を書き、それを Buzza の長女 Sophia に歌ってもらおう。Limpenny も牧師も彼女と一緒に歌う。歌声と笑い声と幸福でそこは一杯になった。Moggridge はまだ分からないようだが、Sophia は Moggridge に強く引かれたようである。人間関係の幸福な変化が起こり初めたのだ。

しかしこういう幸福な出来事ばかりでなく、不幸な結末を予想させるものも見られる。Troy の町の人々はピクニックに出かけることになり、そこで Fogo は Goodwyn-Sandys の妻 Geraldine とある男の話を立聞きしてしまった。幸福そうに見える上流階級夫人も夫を憎悪しているというのだ。彼女はある男に「あなたが好きよ。女性は行動が好きなの。私にちょっとしたことをしてちょうだい。」とせまっている。"One small service" は何かといえば、

'Really, unless you kill the Admiral next time he makes a pun, I do not know that just now I need such a service,' (p. 118)

である。そう Geraldine に言われて、その男は驚いてしまう。その男とは Moggridge であった。こ

の牧歌的な Troy の町にも危険な要素が入り込み、この小説は波乱含みとなった。

一方、Fogo は双子の兄弟 (Paul と Petre) の妹の魅力にますます引かれ始める。川で泳いでいた彼がふとした手違いから服も着れず、そのため悪寒が走り、風邪をひきそうになった時、双子の妹 Tamsin に親切に面倒を見てもらう。その時、彼は

'She is quite beautiful, but—' (p. 127)

と漏らし、その言葉を聞いた Tamsin を激怒させる。言われなかった言葉こそ下賤な彼女を侮蔑する言葉だと彼女は推察したからである。階級意識、差別と被差別の構図が浮かび上がっている。そのように激怒した Tamsin にも兄は優しく諭してやる。

'As for hatin', Tamsin,' he said gravely. "tain't right. Us shud love our neighbours, Scriptur' says: an' I reckon that includes tenants.' (p. 130)

実に素朴で愛情に満ちた人間がここに描かれている。

一方、Geraldine の不審な行動は Sam に対しても向けられる。彼女は Captain's Cabin を見たいと言い、Sam に案内させ、根堀葉堀尋ねる。潮がどこまで満ちて来るとか、持ち主が時々ここにやって来るとか。彼女は夫を愛せなくなったから Sam に一緒に逃げてくれないかという。Geraldine は、S. T. Coleridge の *Christabel* に登場する邪悪な魔女と同じ名前であるが、作者はその特性を Geraldine の創造の際に注ぎこんだとも言えよう。その彼女が“Bower”にかえって来ると、夫は夫で

'I'm sick to death of all this, my dear—of “the Cause”, of Brady, of these people, of myself,' (p. 139)

という状態である。不幸な出来事は不可避と思われる。

Fogo は Captain's Cabin へ行き、そこで茶箱を見つけ、それを運んでいるとき誤って落としてしまう。爆音とともにそれは爆発した。そこに火薬が詰められていたのだ。教会に集まっていた人々はようやく Goodwyn-Sandys 夫妻の不審な行動に気がつき、'Bower'へ駆けつけた。そこはもぬけのから—彼らは Captain's Cabin に火薬をし掛け、急ぎ逃亡した後だった。

Tamsin は Fogo の安否を気づかい駆けつける。Fogo はうめいている。意識はもうろうとして彼は Tamsin にプロポーズをする。しかし、同時に Geraldine の名も口にするものだから彼女として本気になる気にはなれない。医者を呼び Caleb も彼の介抱に精を出す。

一方、新聞を取り読みながら朝食をとっていた海軍将官 Buzza は驚きのあまり新聞を落とす。その新聞には次のような記事があった。

ANOTHER DYNAMITE PLOT!
A WHOLE TOWN DECEIVED—EXTRAORDINARY PROCEEDINGS
ESCAPE OF THE SUSPECTED PERSONS
THE DYNAMITE—FIEND STILL AT LARGE

The existence of another of these atrocious conspiracies aimed at the security of our public buildings and the safety of peaceful citizens, has been brought to light by certain recent occurrences at the romantic little seaport town of Troy. We have reason to believe that the suspicions of the police have been for some time aroused; and it is to their unaccountable dilatoriness we owe it that the conspirators have for the time made good their escape, and still continue to menace our lives and property. It appears that some months back a couple, giving the names of the Honourable Mr and Mrs Goodwyn-Sandys— (p. 204)

The Honourable Mr and Mrs Goodwyn-Sandys とは真っ赤な嘘で、実は火薬犯人であったのだ。Moggridge も Sam もだまされていたことも判明する。一方、Fogo は熱に浮かされていたが、Tamsin の介抱もあって快復に向かい、そしてさめて最初に Tamsin を見る。

'When I awoke again,' he went on, 'she was seated in the window, knitting. I lay for a long while watching her—indeed, this is my first impression—before I made any sign. The sunshine—it was morning—fell on her head as she bent over her needles, and emphasized that peculiar bloom of gold which (you may have noticed) her brown locks possess. Her lashes, too, as they drooped upon a cheek pale (as I could perceive) beyond its wont, had a glimmer of the same golden tint. (p. 208)

最も感動的な一瞬と言えよう。狂気の King Lear が眠りからさめて最愛の娘 Cordelia を見たときの感動—そういう一瞬と言えようか。兄の Peter と Paul が室内に入ってきて話し合う。Tamsin は Fogo の "She is quite beautiful, but—" の意味するところを、階級問題に根ざした軽蔑と取っていたが、彼を許してやり、Geraldine に誘惑されてうわごとで彼女の名を口にしたことも許す気持ちとなり、結局、Tamsin と Fogo の二人は結婚する。結婚した二人は、旅行に London へ、またヨーロッパ大陸へ出かける。しかし Troy の町の世論はこの結婚に対して好意的ではなかった。Limpenny は "If we were all to marry beneath us, pray where should we stop!" (P. 221) ということで、身分の下のもものと結婚することに納得できないでいた。しかし彼らが3年間不在の後 Troy に帰ってきたときには、

Mr and Mrs Fogo have been called upon by the Cumeelfo. (p. 221)

となった。二人は Troy の町の人々に認知されたということである。

Goodwyn-Sandys 夫妻は逃亡して行方知れず。警察もまだ彼らを逮捕していないようである。しかし彼らのダイナマイト、その時限装置は回収された。Mr Moggridge は、知らなかったとはいえ、火薬騒動に荷担したということで役所を辞任し、Admiral Buzza の長女 Sophia と結婚し、保守系の新聞を編集することになる。Buzza の一人息子 Sam も、Geraldine との関係から無罪とは言えないわけだが、Troy を去り大学へ進学する。そして Troy は元の静かな町に戻る。この間の時間の経過は約三ヶ月であった。

この小説の登場人物は Admiral Buzza とその家族、彼らを取り巻く Buzza の妹、牧師、税関吏

(Moggridge) 及び煉瓦運びの男 (Caleb) である。そういう Troy の町の人々を中心に、そこにやってきた貴族 Goodwyn-Sandys と Fogo を巻き込んでこの小説は進展してゆき、火薬爆発を契機として、波乱含みの展開となるが、結末はハッピー・エンドに近いものとなる。何も起こらない町に事件が起こり、後はまた静寂な町に戻ったと言うことである。

小説が展開して行く場所は、Buzza 一家と隣の妹の家、“Kit’s House”, “Bower” と教会とその町の駅及び“Kit’s House”へ通じる川や港であり、ともかく Troy の町の外への移動はない。

このように考えると、小説の材料は Jane Austen ふうな設定に少し変化があるくらいのものであると言えよう。結局、この小説の面白さは特色ある人物の創造にある。その中でも Fogo に仕える Caleb が群を抜いて面白い。彼は Sam Weller (Dickens が作り出した *Pickwick Papers* の忠僕な召使) に似ているといえよう。彼は隠遁者が住む格好の家をさがすことから、料理、洗濯などの仕事や熱病にうなされている Fogo の介抱に至るまで、日々主人のために誠心誠意尽くす。二人が交わす次の会話に注目しよう。

‘Are you dissatisfied with the place or the wages!’

‘That’s et, sir—the wages.’

‘If they are too low—’

‘They bain’t; they be a darned sight too high.’

Mr Fogo leant back in his chair.

‘Too high!’ he gasped. (p. 132)

そのように仕えていながら Caleb は給与が「高すぎる」と不平を言うのだ。賃金関係で結ばれている普通の主従でない。また彼が用いる方言及び比喩は格段に面白い。

‘Are you comfortable?’

‘Thank’ee, sir, gettin’ on nicely. Just a bit Man-Fridayish to begin wi’, but as corrat as Crocker’s mare.’

‘What did you say?’

‘Figger o’speech agen, sir, that’s all.’ (p. 41)

それを聞いている Fogo ならずとも Caleb の比喩はわれわれには容易に理解できない。慣用的に使われている比喩ではなくて、自分勝手に作り、しかも正確な作り方でないからおさら理解が困難なのである。それは、*Much Ado About Nothing* に登場する無学な警察 Dogberry の言葉の誤用 Malapropism を思わせるものである。ともかく、素朴で無学で忠義いぢずな男に、このように方言や誤用を使わせている。こういう人間を作り出した作者の才能はきわめて非凡であるといえよう。Caleb の他に出色な人物と言え、神を信じる純朴で、敬けんな双子の兄弟 Pater と Paul, そして家父長的威厳を取り繕おうとして失敗を繰り返している Buzza の人物創造といえよう。

この小説の手法の一つは、類似物または対照物を次々と提示していることである。それにより、予想された結末とは異なるどんでんがえしを準備する。即ち、内実を熟知せず外面だけで判断する多くの人々の反応を提示することにより、作者は人々の愚かさを摘出しているといえよう。具体的に言えば、‘Q’ は Goodwyn-Sandys と Fogo を同じ日に Troy の町に登場させ、また彼らが住むこと

になる家（上流階級の“The Bower”とハンセン病患者が住んでいた“Kit’s House”）を際だって対照的にさせ、それらを巻き込んで発展する多くの出来事を通じて、外面だけで判断する人々の反応を鮮やかに示しているといえよう。

第二の特色は、風景描写の妙であろう。既に説明を加えたが、Troyの町の正確な描写は、いたるところに見られ、そのため現実から遊離しかねない話の進展に現実感を添える働きをし、かつ第一の特色である人間のリアリテイを補強する働きを持つ。

第三の特色は、異質な要素の導入によって、Troyの町の本来の幸福感を再認識させたことであろう。Troyの町は“beautiful little town”(P. 28)であり、まだ“why, the very heart of the picturesque is here. What more can you want?”(P. 28)であり、また“This is one of the loveliest spots I have looked upon.”(P. 28)ともいう幸福に満ちた町であった。‘Q’はそこに根底から覆す要素を導入することによって、町の人々は日常の幸福感を厳しく認識し、元の幸福な町に戻ることに無上の喜びを感じるのである。騒音にかき乱された後、元の静寂に返った世界は、同じ静寂でも異なった意味を持つ。

こういう手法を通じて、‘Q’が伝えているものは、人間のリアリテイ、日常的な幸福の意味、人間の暖かさ、誠実さ、汚れなさであろう。羅列してみればなんとも平凡で陳腐なものであり、また現代の優れた小説にはあまり見られない要素でもある。なお現代における‘Q’の小説の評価については別な章で考えてみたい。

第三章 ‘Q’の批評・研究等について

‘Q’の文芸批評における活動は驚くべきものがあると言えよう。学生にも説き自らも誇りにしていたものは、ディレクタントとしての「批評眼」であり、それを強力な武器として数多くの書物の編さん、監修の仕事に励んだ。1908年から1912年にかけて、彼自身が選び、序文を付けて33巻にも及ぶ *Select English Classics* を出版した。また1920年には、有名な出版社 J. M. Dent 社の依頼を受けて、同社より *The Kings’s Treasuries of Literature* を彼が総監修者となり出版した。このシリーズは彼の生存中に250巻も発行されて、子供向けの文学シリーズとしては多大の好評を博した。高度に学問的編集の仕事としては、J. D. Wilson と共編で出版した *The New Cambridge Editions of the Works of Shakespeare* であろう。これは1921年より1931年にかけて Cambridge 大学出版局より出版された。‘Q’は「序文」を担当し、Wilson が本文校訂及び注解を担当してきたが、‘Q’の視力悪化のため、Wilson が単独で、後には数人の協力を得て完成したものである。‘Q’の序文は次の作品—*The Tempest, Merry Wives of Windsor, Two Gentlemen of Verona, Measure for Measure, Comedy of Errors, Love’s Labour’s Lost, Much Ado about Nothing, Midsummer Night’s Dream, Merchant of Venice, As You Like It, Taming of the Shrew, All’s Well That’s Ends Well, Twelfth Night, A Winter’s Tale*—に及ぶ。これらは喜劇及びロマンス劇である。‘Q’は本文校訂については心要以上に言及せず、共編集者 Wilson にその仕事を任せている。原典 (source) について詳しく言及するところもあるが、「シェイクスピアが自分の目的に合致するように改作したという事実を知るだけで十分」(“We concern ourselves only with the fact that Shakespeare took it to convert it to his own use.”)²⁶と、それ以上詮索しないことが‘Q’の批評の特色でもある。しかし歴史的視点を毛嫌いするわけではなく、*The Merchant of Venice* では、現代の Shylock 観は、「過度に感傷的になっている」(“over-sentimentalized”)²⁷とその弊害を指摘し、エリザベス朝のユダヤ

人観を詳しく述べ、現代のユダヤ人観との著しい相違を歴史的に解明している。このシリーズは好評を博し、特に20世紀シェイクスピア本文校訂学の先駆者的存在となった J. D. Wilson の名声を高からしめたが、'Q' の存在も忘れてはならないといえよう。

このシリーズでは 'Q' は喜劇・ロマンス劇のみを担当したが、Shakespeare の悲劇・歴史劇に関する彼の研究もある。'Q' は1918年に *Shakespeare's Workmanship* を出版し、その中で、*Macbeth* や *Hamlet* 論、*King Henry VIII* や Falstaff 論等、即ち、喜劇・歴史劇論も書いていた。この研究書で 'Q' が特に意識したのは、A. C. Bradley の *Shakespearean Tragedy* (1904) ではなからうか。'Q' は Bradley を褒めたたえながらも、完全に同調はできなかつた。なぜなら、Bradley が概ね無視したものの、即ち、当時の舞台、観客等を 'Q' はありのまま再現しようと試みているからである。歴史学派といっても良いが、もちろん緩やかな意味のそれであり、ロマン主義批評と画然と一線を引いた歴史学批評家 E. E. Stoll (*Art and Artifice in Shakespeare*, 1933) や Cambridge の同僚 E. M. W. Tillyard (*The Elizabethan World Picture*, 1943) とは異なる。舞台、観客、登場人物等についての歴史的考察が行き過ぎると 'Q' はその作業を中断してしまう。最終的には、"artist dies into his work and in that survives."²⁸ という態度である。「歴史学的」と「審美的」の両者に対する 'Q' の間合いの取り方が絶妙であると言える。

1918年に *Studies in Literature* も 'Q' は出版している。これは *The World's Classics*, *The Edinburgh Review*, *The Times Literary Supplement* 所収の論文や王立科学研究所 (The Royal Institution of London) の講演論文等を集めて一冊の研究書としたものである。ここでは詩人論 (Donne, Herbert, Vaughan, Traherne, Crashaw, Meredith, Hardy, Coleridge, Arnold, Swinburne, Reade), 言葉の定義 ("Classical", "Romantic") 及び英文学の特定のテーマ (愛国主義等) と、じつに多岐にわたっている。この研究書の特色の一つは 'Q' の古典学の素養を感じさせることである。"The Commerce of Thought" の論文では、学問の隆盛を古代の交易ルートとも関連させながら、古代ローマ時代の歴史・経済・思想・芸術を多角的に論じているからである。他の特色としては、優れた形而上学詩人論が見られることである。歴史に残る形而上学論と言えば、H. J. C. Grierson の John Donne のテキスト (1912年) 及び *Metaphysical Lyrics and Poems of the Seventeenth Century* (1921) 及び Grierson に呼応して書かれた T. S. Eliot の "Metaphysical Poets" (1921) であろう。Grierson は、長い年月顧みられなかった形而上学詩人の著作を厳密に本文校訂をしたテキストを出版したことで著名であり、Eliot は形而上学詩人の再評価を劇的になしたことで知られている。'Q' の論文は、Grierson や Eliot ほど劇的なインパクトを与えはしなかつたが、'Q' の形而上学詩人に対する関心及びその出版は1918年という早い時期だったことに注目しなければならない。Grierson のテキスト出版より後ではあるが、*Metaphysical Lyrics* および "Metaphysical Poets" の発表より早い時期なのである。形而上学詩人は Dryden, Pope, Johnson 及び Coleridge によって過小評価され、そういう低い評価が普通であった当時において、'Q' は "And truly he [Donne] was a great man; yes, and is one of the greatest figures in English literature. . . ." ²⁹ と述べている。Donne に対する 'Q' の評価はどこにあるのかと言えば、その独特のリズムにたいしてであった。それは英詩の「活気のない」 ("effete") ³⁰ リズムと「ペトルカ文体」 ("Petrarch-in-English") ³¹ をうち破ったといえる—そう 'Q' は主張した。当時としては卓見と言うべきではなからうか。

次に 'Q' の研究書の中で優れたものをいくつか選び詳しく紹介したい。
既述した *Studies in Literature* (1918) 所収の論文に "Ballads" があるが、まずこれを取り上げたい。

‘Q’は最初バラッド (ballads—歌謡) の作者について考える。集まった大勢の人々がバラッドを作ったということは芸術の性格からして考えがたい。その他大勢という人々ではなく、吟遊詩人 (“minstrels”) が作ったのではなかろうか。彼らは町から町へ渡り歩き、バラッドを作り、そして歌った職業詩人だと ‘Q’ は考えている。彼らは弟子を残さなかった。なぜなら、印刷術の普及のため、その職業は衰えてしまったからである。では、300年も前のバラッドがなぜ現在も残っているのだろうか。それについて、‘Q’ は

Whence in the world would anyone expect to recover them [ballads], save from descendants of those simple folk *for* whom they were written and from whom they have been transmitted?³²

と反問し、事実上それに答えている。そしてバラッドの作者を問題とするより、「人々のために」 (“for the people”) 書かれたバラッドの特質にこそ注目しなければならない。その特質を強調するものは、逆説的だが、「個人的な特色を忌避する」 (“avoidance of the self-conscious personal touch”) ³³ というバラッドの基調である、と ‘Q’ は考えている。だから優れたバラッドは作者不詳、没個性となるのである。そして伝達性と没個性の関係について ‘Q’ は次のように述べている。

... it is not only that the more a ballad suffers wear and change the more it remains the same thing: it is that the more it wears, the more it takes that paradoxically sharp impress, the impress of impersonality.³⁴

もう一つの特色は「動きの異常なまでの速さ」 (“extraordinary rapidity of movement”) ³⁵ である。例えば “Sir Patrick Spens” では、と ‘Q’ は考えている、Dunfermline の風景から始まって、ノールウェイ王及びその宮廷の描写と次々と場面が移って行く。このような速い転換が一つの様式にまでなっている、と ‘Q’ は述べている。ある語りから別な語りへのギャップをこういう転換で埋めている。

もう一つのバラッドの特色として、‘Q’ は「四つの線」を主張した。地図上の二つの線及び制作年代の二つの線のことである。前者の線は Newcastle-on-Tyne から St Bee’s Head の線。有名なバラッドのほとんどはこの地域で作られている。特に戦のバラッド (例えば, *Otterburn*, *Chevy Chase*, *Kinmont Willie*, *Hobbie Noble*, *Jamie Telfer in the Fair Dodhead*) のほとんどすべては England と Scotland の国境近くで作られている。しかし最上級のバラッドの題材は戦争ではなく、また制作地域は二つの川 (Tweed 川と Teviot 川) の上流近辺で作られたものである。次に二つの制作年代上の線とは 1350 年と 1550 年のことである。この時期にバラッドは生まれ、栄え、そして衰退した。しかし Wyatt, Surrey, Lyly の時代になると、新しい個性的な詩が流行し、バラッドの没個性を駆逐したといえよう。エリザベス朝では次のようなバラッドの改作が流行した。次に引用するのは元のバラッドである。

‘As ye came from the holy land
Of Walsingham,
Met you not with my true love

By the way as you came?’

‘How shall I know your true love,
That have met many a one
As I came from the holy land,
That have come, that have gone?’

‘She is neither white nor brown,
But as the heavens fair;
There is none hath her from divine,
In the earth or the air,’

.....

これが次のように改作される。

Know that Love is a careless child,
And forgets promise past;
He is blind, he is deaf when he list,
And in faith never fast.

His desire is a dureless content
And a trustless joy;
He is won with a world of despair
And is lost with a toy.

But true love is a durable fire
In the mind ever burning,
Never sick, never old, never dead,
From itself never burning.³⁶

これにたいして ‘Q’ は、

You see how far we are getting from the simplicity of the first stanzas? But worse, far worse, is to come.³⁷

と述べている。改作に際して、道徳と洗練性が前面に出てきて、バラッドの生命たる純朴性を損ねているのである。このバラッド論を ‘Q’ は次のように締めくくっている。

Now let me say, before concluding, that greatly as I adove these old ballads I do so not

idolatrously. They are genuine poetry, peculiar poetry, sincere poetry; but they will not compare with the high music of Spenser's *Epithalamion* or of Milton's *Lycidas* or of Keats' *Nightingale*. In truth any comparison of the ballads with these would be unfair as any comparison between children and grown folk. They appealed in their day to something young in the national mind. They have all the winning grace of innocence; but they cannot scale the great poetical heights any more than mere innocence can scale the great spiritual heights.³⁸

On the Art of Reading (『読書論』) について

これは 'Q' の批評の中心をなすものといって良からう。12の論文からなり、それらはすべて 'Q' が Cambridge 大学でなした講義である。'Q' 自身が、

... they form no compact treatise but present their central idea as I was compelled at the time to enforce it, amid the dust of skirmishing with opponents and with practical difficulties.³⁹

と言明しているように、全体がまとまりのある著作ではない。それらの講義とは

Introductory

Apprehension *Versus* Comprehension

Children's Reading (I)

 " " (II)

On Reading for Examination

On a School of English

The Value of Greek and Latin in English Literature

On Reading the Bible (I)

 " " (II)

 " " (III)

Of Selection

On the Use of Masterpieces

である。その中で特に重要な次の三項目 (6 講義) — "Introductory", "Children's Reading (I), (II)", "In Reading the Bible I, II, III" — を紹介したい。

最初は Introductory。'Q' は別な機会に述べた文章をここでも引用している。

"The man we are proud to send forth from our Schools, will be remarkable less for something he can take out of his wallet and exhibit for knowledge, than for *being* something, and something recognisable for a man of unmistakable breeding, whose trained judgment we can trust to choose the better and reject the worse."⁴⁰

'Q' は知識よりも重要なものの存在を指摘し、更に続けて言明している。

If, still putting all your trust in Knowledge, you try to dodge the difficulty by specialising, you produce a brain bulging out inordinately on one side, on the other cut flat down and mostly paralytic at that.⁴¹

これは専門化し過ぎることへの警告でもある。それを明白にするために、Browningの *A Death in the Desert* にある概念、即ち、*What Does, What Knows, What Is* を援用する。まず 'Q' は *What Does* について説く。

I am not likely to depreciate to you the value of *what Does*, after spending my first twelve lectures up here, on the art and practice of Writing, encouraging you to *do* this thing which I daily delight in trying to do⁴²

「書く」、「読む」という「行為」を過小評価しているわけではなく、もっと高次元のものがあるはずだと 'Q' は考えているのである。そのため次の段階についてふれる。

Neither do I depreciate—in Cambridge, save the mark!—*What Knows*. All knowledge is venerable; and I suppose you will find the last vindication of the scholar's life at its baldest in Browning's *A Grammarian's Funeral*. . . .⁴³

と、'Q' は述べた後で、

Nevertheless, Knowledge is not, cannot be, everything; and indeed, as a matter of experince, cannot even be counted upon to educate.⁴⁴

と、「知識」は重要ではあるが、それは教育の目標として十分なものではないと考えている。では何が一番重要かと言えば、*What Is* であると考えて、'Q' は次のように述べる。

The first promise is, that *What Is*, being the spiritual element in man, is the highest object of his study.

The second promise is that, nine-tenths of what is worthy to be called Literature being concerned with this spiritual element, for that it should be studied, from firstly up to ninthly, before anythig else.⁴⁵

What Is とは人間の精神的要素であり、またこれこそが文学研究の最高の目標である。'Q' は *What Does, What Knows, What Is* を、そのどちらも必要としながらも、*What Is*こそ最も重大であると見なしている。彼は機会あるごとにこのことを主張し、具体的な著作活動でそれを肉付している。

次は *Children's Reading*”について。

'Q' の同時代の心理学者 Mr Holmes が、その著作 *What Is, and What Might Be* で力説した子供の特性を、'Q' 自身が次のように引用している。

The child desires

- (1) to talk and listen;
- (2) to act (in the dramatic sense of the word);
- (3) to draw, paint and model;
- (4) to dance and sing;
- (5) to know the why of things
- (6) to construct things.

このリストの第一「しゃべり、聞こうとする(欲求)⁴⁶」を、'Q'は「伝達の本能」("communicative instinct")⁴⁷と呼び、どの子供も回りの親しい人達と、したり、見たり、感じていることを語り、またそれらを聞きたがる「伝達の本能」を持っているという。次に'Q'は、第二の「演じる(欲求)」を「演劇的本能」("dramatic instinct")⁴⁸、第三の「描く(欲求)」を「芸術的本能」("artistic instinct")⁴⁹、第四の「踊り、歌う(欲求)」を「音楽的本能」("musical instinct")⁵⁰とそれぞれ呼び、これらは Aristotle が「模倣の本能⁵¹」と呼ぶものに該当すると考えている。'Q'が初期の段階で「模倣の本能」をことさら取り上げたのは、彼の念頭に Aristotle の『詩学』(*Poetics*)—

Epic poetry and Tragedy, Comedy also and dithyrambic poetry, and the greater part of the music of the flute and of the lyre, are all, in general, modes of imitation. . . . Even dancing. . . imitate character, emotion and action, by rhythmical movements.⁵²

一が、彼の理論的根拠としてあったからである。'Q'は「模倣の本能」に関して、Aristotle の『詩学』を 'Q' の同時代の批評家 Dr Gummere の次の説

To imitate, then, being instinctive in our nature, so too we have an instinct for harmony and rhythm, metre being manifestly a species of rhythm; and man, being born to these instincts and little by little improving them, out of his early improvisations created Poetry.⁵³

で補強している。

すべての子供は「模倣の本能」から出発するが、もちろんこれだけで良いわけではなく、この本能と区別される第五の「知りたがる本能」("inquisitive instinct")⁵⁴に発展して初めて、子供は「知識の宮殿」に至る鍵を手に入れることができる。このような知識の獲得は重要でもある。しかし更に重要なことは、第六の「構成の本能」("constructive instinct")⁵⁵であり、'Q'によればこの本能は、分析の後の総合にも似て、ばらばらにしていた玩具を子供が組み立てるようなものである。もちろんこの本能は、'Q'が後ほど主張する「自己実現」(最高の自己を作ってゆくこと)のことである。

'Q'は子供の「模倣の本能」と「自己実現」の関係について次のように述べている。

Clearly in obeying the instinct which I have tried to illustrate, he is searching to realise himself; and, as educators, we ought to help this effort—or, at least, not to hinder it.

Further, if we agree with Aristotle, in this searching to realise himself through imitation, what will the child most nobly and naturally imitate? He will imitate what Aristotle calls 'the Universal,' the superior demand. And does not this bring us back to consent with what

I have been preaching from the start in this course—that to realise ourselves in *What Is* not only in degree transcends mere knowledge and activity, *What Knows* and *What Does*, but transcends it in kind.⁵⁶

‘Q’がここで力説していることは、子供は模倣を通じて徐々に自己を完成させて行く、即ち、以前に考察した *What Does*, *What Knows*, *What Is* とも彼は関連づけて、「行為」や「知識」ばかりでなく、質的にもっと高次元の「存在」において子供は自己を完成させて行くということである。読書を通じて、子供たちはこういう能力を発達させて行くのである。

次は”On Reading the Bible”について。

聖書は「英文学の一部である」との認識から、‘Q’は大学の英文学の講義で正式に聖書(特に『欽定訳聖書』*Authorised Version*)を取り上げた。これはその講義録である。その鑑賞の仕方は、“Read not to Contradict and Confute”⁵⁷という Francis Bacon のしん言を引用して、その諸説を押し進めることである。まず聴講の学生に、‘Q’は

My first piece of advice *on the reading the Bible* is that you do it.⁵⁸

と、ごく当り前の忠告をする。なぜなら、若い人々は聖書を読み、それを楽しむという当り前の事はしなくなってきたとの認識が、‘Q’にあるからである。従って、できる限り早い時点で、学生に聖書を読むことを勧めている。その読み方とは、

Let a youngster read this, I say, just as it is written; and how the true East—sound, form, colour—pours into the narrative!—cymbals and trumpets, leagues of sand, caravans trailing through the heat, priest and soldiery and kings going up between them to the altar; bloods at the foot of the steps, blood everywhere, smell of blood mingled with spices, sandal-wood, dung of camels!⁵⁹

であって、要は偉大な文学として聖書を楽しむことから始めなければならない、と‘Q’は指摘している。

ではなぜ学校教育現場で聖書を教えることが禁止され、英文学科の講義や試験科目からも外されているのかを、‘Q’は自ら問いただす。その理由として、タブーにたいする原始的本能、聖なるものには言及すべきでないという盲目的崇拝及び聖なるものは享受すべきでないという誤った聖教徒の態度だと、‘Q’は考えている。そういう誤った考えに反駁するために、‘Q’はギリシヤ人と Homer の詩にたいする彼らの態度を最初に引き合いに出している。われわれの多くは『旧訳聖書』(*Old Testament*)は Homer の詩よりも神聖であると考えているが、当時の人々の態度は必ずしもそうではなかったからである。ギリシヤを代表する Plato, Aristotle, Longinus は、三人とも、聖書と Homer を同じように敬けんに取扱い、また同じように詩としても享受したという。そこで‘Q’はさらに続ける。

For indeed the true Greek mind had no thought to separate poetry from religion, as to the true Greek mind reverence and liberty to enjoy, with the liberty of mind that helps to enjoy, were all tributes to the same divine thing, They had no professionals, no puritans, to hedge

it off with a *taboo*; and so when the last and least of the three, Longinus, comes to *our* Holy Writ—the sublime poetry in which Christendom reads its God—his open mind at once recognises it as poetry and as sublime, ‘God said, Let there be light; and there was light,’ If Longinus could treat this as sublime poetry, why cannot we, who have translated and made it ours?⁶⁰

要するに、われわれ現代人も聖書に対して抱く宗教性と自然に感じる詩的美しさをことさら分離すべきではない、ということである。更に続けて、宗教性のみならず、詩的価値及び言葉の美しさのためにも聖書は続まれるべきことである、と‘Q’は主張している。結局、宗教と詩は不可分であるから、“... we should clothe the Bible in a dress through which its beauty might best shine,”⁶¹と、なるう。

‘Q’は問題を更に具体化する。聖書は文学の傑作であるばかりではなく、研究の対象としても、*The Canterbury Tales* や *Hamlet* 等と同じように価値あるものと‘Q’は考え、その例として、*The Book of Job* を取り上げる。その理由は二つある。第一の理由は、厳粛な大建築さながらのスケールの大きさ、崇高な着想、過不足のない言葉使いという点において聖書の中には *The Book of Job* の右に出るものはない、と‘Q’は考えているからである。第二の理由は、*The Book of Job* は詩として簡潔で、構成は素朴で、かつ手際よく提示されており、Miltonが“a brief model”⁶²と驚嘆したくらいのものである。それほど優れた詩であるから、大詩人が聖書を使い自らの叙事詩を書き上げるとき、*The Book of Job* を選ぶことはなんら不思議ではない。事実、Miltonも Shelleyも *The Book of Job* を取り上げようと試みた。そのことは現在も保存されている彼らの原稿を見れば分かる。ではなぜ取り上げなかったか。聖書を題材とした叙事詩を書きながら、二人の大詩人が *The Book of Job* を取り上げなかった理由を、‘Q’は次のように説明している。

Now you may urge that Milton and Shelley dropped Job for hero because both felt him to be a merely static figure: and that the one chose Satan, the rebel angel, the other chose Prometheus the rebel Titan, because both are active rebels, and as epic and drama require action, each of these heroes makes the thing move; that Satan and Prometheus are not passive sufferers like Job but souls as quick and fiery as Byron’s Lucifer:

Souls, who dare use their immortality—
Souls who dare look the Omnipotent tyrant in
His everlasting face, and tell him that
His evil is not good.⁶³

彼らが展開したい主題に Job という人物がそぐわない、ということであろう。しかし‘Q’は自分の出した答えに更に反問している。なぜなら彼らが主題を変えれば別な詩を書くことができた、と彼は思ったからである。それにたいして‘Q’は、Miltonも Shelleyも *The Book of Job* を“a magnificent poem already, and a poem on which, with all their genius, they found themselves unable to improve,”⁶⁴と考え、‘Q’は次のように結論を述べている。

Structurally a great poem; historically a great poem; philosophically a great poem; so

rendered for us in noble English diction as to be worthy in any comparison of diction, structure, ancestry, thought! why should we not study it in our English School, if only for purpose of comparison?⁶⁵

On the Art of Writing について

'Q' が Cambridge 大学教授に就任して最初の著作がこれである。この著作の主な目的は、文章を書く練習をすることにより、適切で、正確で、説得力のある文章を書く学生を養成するという実際的なものであり、なおかつ

Great as is our own literature, we must consider it as a legacy to be improved. Any nation that potters with any glory of its past, as a thing dead and done for, is to that extent renegade. If that be granted, not all our pride in a Shakespeare can excuse the relaxation of an effort—however vain and hopeless—to better him, or some part of him,⁶⁶

という、過去の文学に現代の息吹きを添える高い理想と現実性を持ち合わせたものである。これも大学の講義録をほとんどそのまま収録し、本の形にして出版したものである。その内容は次の通り。

Inaugural

The Practice of Writing

On the Difference between Verse and Prose

On the Capital Difficulty of Verse

Interludes; on Jargon

On the Capital Difficulty of Prose

Some principles Reaffirmed

On the Lineage of English Literature(I)

 " " " (II)

English Literature in our Universities(I)

 " " " (II)

On Style

このように「作文論」、「英文学研究方法論」、「文体論」等多岐にわたっているが、'Q' の特色を最も表しているものは、1913年1月29日、Vice-Chancellor 初め多くの大学関係者を前に、'Q' が初めてした講義 "Inaugural" (「教授就任講義」) であろう。

初代教授 Arthur Verrall は就任後約一年で死去したため、Cambridge 大学に教授の伝統を残したとは言えない、と 'Q' は始めている。その職務は、'Q' にとっては "That is as it may turn out."⁶⁷ としか言えないばかりとしたものである。教授職の条件の一つは

It shall be the duty of the Professor. . . to promote. . . the study in the University of the subject of English Literature.⁶⁸

だが、その "subject" とは一体どういうものかも定かでなかった、と 'Q' は言う。また英文学は教え

るに値するものなのかとの疑念も、多くの人々が抱いていたという時代であった。そこで 'Q' は英文学研究を進めるに当たり、次の三つの原理を提示している。

第一の原理は、

... in studying any work of genius we should begin by taking it *absolutely*.⁶⁹

である。作者が意図したものをそのまま受け取ればよい。作者が伝達したいものに研究者（読者）は心の窓を開け、それに全身全霊を委ねればよい、と 'Q' は主張する。具体的にどうすれば良いかといえば、Dr Johnson が定義したように、普通の人々が以前とは異なった感じ方、即ち、"with a great increase of sensibility"⁷⁰であり、また Wordsworth の言葉を借りれば、"feel that we are greater than we know."⁷¹なのである。従って、'Q' が主張していることは、研究者の知識よりは感受性を重視することである。更に続けて 'Q' は述べている。

... so that the man we are proud to send forth from our Schools will be remarkable less for something he can take out of his wallet and exhibit for knowledge, than for *being* something, and that 'something' a man of unmistakable intellectual breeding, whose trained judgment we can trust to choose the better and reject the worse.⁷²

この考えは 'Q' の研究・教育にたいする根幹であり、生涯変わることがなかったものである。

第二の原理は、

... by constantly aiming at the concrete, at the study of such definite beauties as we can see presented in print under our eyes; always seeking the author's intention but eschewing, for the present at any rate, all general definitions and theories. . . .⁷³

である。更に続けて、

Literature is not an abstract Science, to which exact definitions can be applied. It is an Art rather, the success of which depends on personal persuasiveness, on the author's skill to give as on ours to receive.⁷⁴

と、'Q' は述べている。研究・批評の中心的思想と言えるもので、これも生涯変わることがなかった。

第三の原理は、

As Literature is an Art and therefore not to be pondered only, but practised, so ours is a living language and therefore to be kept alive, supple, active in all honourable use.⁷⁵

である。これは文学研究と実践の関係についてであり、第二及び第三の原理を合わせると、小説家にして学者としての 'Q' の特色が浮かび上がる。これら三つの原理はきわめて重要であるので、更に

次章で考察したい。

第四章 'Q' の評価について

'Q'は小説、選集、批評・研究等の各方面において、多くの業績を残してきた。この章では、これらに対する評価を試みたい。

既述したが、'Q'は小説家としてスタートした。彼の代表的小説 *Troy Town* に見られるように、'Q'は風景描写と性格描写が卓越した作家である。大抵の場合、'Q'は対象を着実に捉え、洗練された文体で表現している。そして彼は生涯愛した Fowey (*Troy Town*) という港町を幾度となく描いている。幸福な町とそこに住む人間の温かさ、汚れなさを描くことが彼の年来のテーマであったと言える。しかし、20世紀イギリス小説史のなかで 'Q' を位置づけると、彼は偉大な存在とは言えない。'Q'には革新的な新しさに欠ける。出版された当時はそれなりの読者はいたが、今日に至って彼の小説を読むことはまれである。Basil Willey は 'Q' の死後15年後ですら、書店で彼の小説を見つけることは困難である、と報じている。⁷⁶ Willey は更に続けて、

I suggested 'Arthur Quiller-Couch' as the subject for a university prize essay; this was adopted, and three or four candidates completed. Even the best of these treated 'Q' *de haut en bas*, as a rather pathetic old writer of the dim past, who had lived far off on the Edwardian side of the Great Divide, and done pretty well in his time, when you considered the stiflingly sentimental, romantic, prudish, patriotic and liberal atmosphere he had had to breathe.⁷⁷

と、述べている。それにもかかわらず、彼の郷里 Cornwall 州の出版社から、現在でも細々と版を重ねている数点の小説があり、限られた人々に読まれている。それは20世紀の小説が急速に見失ったもの一人間の温かさ、汚れなさ、優しさ、誠実さというものを軽快なタッチで描くこと一を、'Q' の小説はまだ見直しを迫る力を持っているからであろう。少なくとも、Cornwall 州においては、あるいは Fowey においては、そうであるといえる。しかし重要なことは、'Q'は創作家であり、同時に文芸批評家、学者であるということである。'Q'は小説家として偉大でなくとも、また多くの小説は読まれなくても、'Q'は創作の態度と批評の態度を決して切り離すことはなく、その合一を説き続けた事実は否定しがたい。そして Cambridge English School における I. A. Richards, William Empson, C. S. Lewis, Raymond Williams と創作家にして学者という伝統を、'Q'自身が打ち立てた功績は大である。

選集(アンソロジー)の分野ではどうであろうか。'Q'は画期的業績を残したといっても良からう。その主なものは *Oxford Book of English Verse* であり、これは世界中の人々に愛読されたといっても過言ではない。選んだ詩は、叙情詩(短編及びいくつかの長編)及び風刺詩(epigrammatic)である。風刺詩も「わくわく興奮」("thrill of emotion")⁷⁸を引き起こすと考えたからである。この点は F. T. Palgrave とは大きく異なる。綴り字に関して、'Q'は現代化することが詩全体の効果を破壊する場合は古い綴り字を残したり、保存したために多くの読者を困惑させる場合は綴り字を現代化するように工夫をした。'Q'は臨機応変に処理したといえる。理解困難な詩は、原作に注の番号を付けずに頁の下の部分に注釈を書き、そのために平均的な読者は、辞書を引くこともなく、テ

キストを読み進むことができるよう、'Q'は工夫もした。19世紀における代表的なこの種の詩華集である F. T. Palgrave の *The Golden Treasury* (1861) では短編叙情詩だけが収録され、また詩の内容・テーマの連続性を意図したその配列に特色があったが、'Q'は作者不詳の清新な "Cuckoo Song" を最初に据え、詩人の生誕順序に配列を改めた。詩の連続性を基調とした Palgrave の配列では、全体が有機的でしかも引き締まった選集とはなるが、それだけに短編叙情詩という単一の分野しか収録できないという欠点も生まれ、しかも内容の連続性という点からもアンソロジー全体の量が限られるという欠点も生まれて来る。これに反して 'Q' の詩華集は、詩人の生誕順という単純でしかもはるかに多くの詩を収録できる枠組を持っており、しかも改訂による修復可能な余地も残している。同一の内容・効果に限らず、また叙情詩以外に風刺詩も収録されており、その結果アンソロジー全体が異質な要素も持った豊かなものとなっている。これにより、英詩を愛読し、あるいは英文学を正式に学ぶことになった人は多大な数にのぼると思われる。またこのアンソロジーは、*Golden Treasury* とは違った範を示すこととなり、この後に出るアンソロジーの見本とでもいうべきものとなった。'Q'はこの後、同じ Oxford 大学出版局から、*The Oxford Book of Ballads* (1910)、*Oxford Book of Victorian Verse* (1912)、*The Oxford Book of English Prose* (1925) と相次いで詩華集を出版し、Oxford 大学出版局のアンソロジー・シリーズでは中心的な役割を果たしたといえよう。

次に 'Q' の著した批評・研究書について言えば、*Shakespeare's Workmanship* (1918)、*Charles Dickens and Other Victorians* (1925)、*Arnold* (1937) という特定作家の研究から、*Studies in Literature* (1918)、*Adventure in Criticism* (1924)、*A Lecture on Lectures* (1927) と批評一般にわたるものまで、その領域は広いといえよう。これらの中で傑出したものはなんといっても *On the Art of Writing* (1916) と *On the Art of Reading* (1920) ではなからうか。この二つの著作によって、創設された Cambridge English School に 'Q' の学問的伝統を樹立したといえよう。この二つの著作から、'Q' の研究の特色を考えてみたい。

第一の特色は、この両書において 'Q' は英文学研究が過度に専門化することへの危ぐを表明したことである。'Q' が強調するのは「精神的要素」("spiritual element" または "What Is") であり、良いものを取り入れ、劣ったものを拒否する「批評眼」であるといえる。Cambridge English School は English Tripos (1926) の改正を機に「批評」を重視するに至るが、'Q' のこの考え方も影響を与えていると思われる。

第二の特色は、将来パブリック・スクール等の教師になるであろう Cambridge 大学の学生に、'Q' が子供の読書の仕方を教えたことではなからうか。子供にたいする読書指導は、'Q' によると、当時のパブリック・スクールやグラマー・スクールではなかったことであり、いわんやそれが Cambridge 大学で取り上げられるとは大方の人々が予想しなかったことであろう。これにより、子供に読書の喜びを教え、学問を志した Cambridge の学生に、勉学の初心を知らしめることに役立ったと言えよう。

第三の特色は、『欽定訳聖書』にたいする 'Q' の革新的な態度である。その一としては、それを大学英文科の講義で取り上げた 'Q' の先見性であろう。『欽定訳聖書』の文学的価値及び英文学に及ぼした影響は、現在では常識となっていることではあるが、当時としてはそうでもなかった。'Q' によれば、『欽定訳聖書』は学校教育の現場で教えることが禁止され、大学の英文学の講読や試験科目からも外されていた。「教育の現場で聖書を教えることはタブーであった」—われわれには想像できない状況であったのである。その二は、『欽定訳聖書』を批評家にして創作家の態度で見ていることである。Milton や Shelley が聖書を熟読し、独特な解釈を加え、そこから偉大な作品を作り出してい

ったと同じ態度で‘Q’は聖書を見ている。即ち、その英訳聖書を単に盲信することも、また用語や成立の事情等の細部にわたる研究にはいることもなく、大ぶりではあるが、まことに創造的で、嘘のない本音の批評態度を‘Q’は維持した。その第三は、聖書を子供にも理解させようとしたことである。そのためには、‘Q’は *The Children's Bible* (with A. Nairne and T. R. Glover, 1924) 及び *The Cambridge Shorter Bible* (Arranged with A. Nairne and T. R. Glover, 1928) を出版した。このようにして、大人の占有物であった聖書を、また専門家の占有物になりかねない文学を、誰にでも理解しやすいように終始努めた人物は、Cambridge English School の今日に至るも、‘Q’をおいていないと言えよう。

‘Q’の第四の特色は、文学研究を作家の態度に密接に関係づけたことである。文学とは厳密な定義を当てはめる抽象的な学問ではない、と述べたばかりでなく、文学の研究と文学の創作は相即不離の関係にあると、‘Q’は「教授就任講義」で主張し、これを一生捨てることはなく、それを肉付けする仕事を続けていったことである。

次の特色として、‘Q’自身が簡略にまとめたものをそのまま引用したい。

The first. That literature cannot be divorced from life: that (for example) you cannot understand Chaucer aright, unless you have the background, unless you know the kind of men for whom Chaucer wrote and the kind of men whom he made speak; that is the *national* side with which all our literature is concerned.

The second. Literature being so personal a thing, you cannot understand it until you have some personal understanding of the men who wrote it. . . . Until you have grasped these men, as men, you cannot grasp their writings. That is the *personal* side of literary study, and as necessary as the other.

The third. That the writing and speaking of English is a living art, to be practised and (if it may be) improved. That what these great men have done is to hand us a grand patrimony; that they lived to support us through the trail we are now enduring, and to carry us through to great days to come. So shall our sons, now fighting in France, have a language ready for the land they shall recreate and repeople.⁷⁹

これは‘Q’が主張し、それが1926年の English Tripos 改正の際に大学評議会で支持されたものであるから、Cambridge English にとっては極めて重要な意味を持つと考えてよからう。というのは、改正した Tripos はあくまで English Tripos であって、English Literature Tripos ではないからである。それは“. . . it [the Tripos] promoted the study of literature not only as such but in its historical and social setting.”⁸⁰であり、文学を「歴史的、社会的背景のもとに」研究する Cambridge English の態度は、Tripos 改正に際して‘Q’が主張した第一の点の実現である。同じく伝統のある Oxford 大学英文科は、School of English Language and Literature であり、それは文学と語学におかれる均等のウエイトを意味して発足した。こう考えると、Oxford と違った Cambridge English School の特色作りに‘Q’は貢献したと言える。

このように国内ばかりでなく国外においても著名であり、また Cambridge 大学においても、これほどまでに学生であふれていた教室がないほど多くの人々を引き付けた‘Q’も、最後まで名声を全うしたかという点、そうではない。台頭した若手の研究者—I. A. Richards, E. M. Tillyard, F. R.

Leavis 等一のために、彼の名声もかすむということになった。あるいは、彼の研究方法は時代遅れとの印象も与えたことがある。ともかく、Tripos 改正後の Cambridge English School には、二つの研究の流れが生まれ、それは“conflicts between the scholars and the dilettanti”とあるように対立することになる。現在でも Cambridge に存在する対立であるが、さしずめ ‘Q’ はディレッタントを代表するといえよう。両者は常に画然とした区別・対立ではなく、往往にして、影響しあい、時には一方が、時には他方が強くなって、今日に至るも Cambridge English School の特色となっている。英文学研究は学問として「無益である」とまで言われた時代があったが、科学的に、緻密にその方法論も整備されてきた。学問として長足の進歩をとげてきたといえる。しかし、文学研究は科学的、専門的方法論という永遠に一本道というわけにはいかない。専門化すればするほど、文学のリアリティから離れかねないものである。‘Q’ はこの時代にその危険をすでに指摘していた—そういう意味では ‘Q’ は先見性があるといえる。

‘Q’ のもっともよく理解者であり、‘Q’ の後を襲って King Edward VII Professor となった Basil Willey は *Troy Town* 改訂版の序文で、‘Q’ の全体性を見て次のように述べているが、これを ‘Q’ の評価の結びとしたい。‘Q’ は一面的にのみ見られてはいけないことを付け加えよう。

What was the secret of his ascendancy [his appointment to the King Edward VII Chair of English] ? Others excelled him as novelists or as poets, and he never, in spite of his wealth of reading, pretended to be in the strict sense a ‘scholar.’ What made him a legendary figure in his own lifetime, what lent glamour to his every word and deed, was a combination of qualities seldom found in union even then, and probably never again to be so found.⁸¹

第五章 ‘Q’ の主な出版物リスト

F. Brittain 著 *Arthur Quiller-Couch—A Biographical Study of Q* 所収の“Chronological List of Q’s Publication” (pp. 159-66) より、‘Q’ の主な出版物を抜き出して次に掲げる。

出版年度	出版物名
1881.	<i>Athens, a Poem.</i>
1887. n.	<i>Dead Man’s Rock.</i>
1888. n.	<i>The Astonishing History of Troy Town.</i>
1889. n.	<i>The Splendid Spur.</i>
1891. n.	<i>The Blue Pavilions.</i>
1895. a.	<i>The Golden Pomp, a Procession of English Lyrics from Surrey to Shirley.</i>
1896. n.	<i>Ia.</i>
	<i>Poems and Ballads.</i>
	<i>Adventures in Criticism.</i>
1897. a.	<i>English Sonnets.</i>
1899. n.	<i>The Ship of Stars.</i>

- Historical Tales from Shakespeare.*
A Fowey Garland.
1900. a. *The Oxford Book of English Verse 1250-1900.*
1902. n. *The Westcotes.*
1903. n. *The Adventures of Harry Revel.*
 n. *Hetty Wesley.*
1904. n. *Fort Amity.*
1905. n. *Shining Ferry.*
Shakespeare's Christmas and Other Stories.
1906. n. *Sir John Constantine.*
 n. *The Mayor of Troy.*
From a Cornish Window.
 a. *The Pilgrim's Way, a Little Scrip of Good Counsel for Travellers.*
1907. n. *Poison Island.*
 n. *Mayor Vigoureux.*
- 1908-12. Edited *Select English Classics*, with Introductions, 33 small volumes.
1909. n. *True Tilda.*
1910. n. *Lady Good-for-Nothing.*
 a. *The Oxford Book of Ballads.*
1911. n. *Brother Copas.*
1912. n. *Hocken and Hunken, a Tale of Troy.*
 a. *The Oxford Book of Victorian Verse.*
1915. n. *Nicky-Nan, Reservist.*
1916. *On the Art of Writing: Lectures delivered in the University of Cambridge 1913-14*
1918. n. *Foe-Farrell.*
- 1920-44. General Editor of 'The King's Treasuries of Literature.'
1920. *On the Art of Reading: Lectures delivered in the University of Cambridge 1916-17.*
1921. *Select Stories*, chosen by the Author. ('The King's Treasuries of Literature.')
- The New Cambridge Edition of the Works of Shakespeare*: edited by Q and J. Dover Wilson, with Introductions by Q, 14 vols.
1924. *The Children's Bible*, edited by A. Nairne, Q, and T. R. Glover.
The Little Children's Bible, edited by A. Nairne, Q, and T. R. Glover.
1925. *Charles Dickens and Other Victorians.*
 a. *The Oxford Book of English Prose.*
1926. *The Age of Chaucer.*
1927. *A Lecture on Lectures.*
1928. *The Cambridge Shorter Bible*, edited by A. Nairne, Q, and T. R. Glover.
The Duchy Edition of Tales and Romances by Q (with new Introductions).

1929. *Studies in Literature*, 3rd Series.
 1930. *Green Bays; Verses and Parodies*.
 a. *Pages of English Prose 1390-1930*.
 1934. a. *Felicities of Thomas Traherne*, with an Introduction.
 1935. a. *English Sonnets, a New and Enlarged Edition*.
 1937. *Mystery Stories: Twenty Stories from the Works of Sir Arthur Quiller-Couch*.
 1939. a. *The Oxford Book of English Verse 1250-1918*.
 1943. *Cambridge Lectures*.
 1944. *Short Stories*. (28 stories selected by Q from previous volumes).
 Memories and Opinions, an Unfinished Autobiography.

NOTES

- 1 Sir Arthur Quiller-Couch を 'Q' と度々略記することとする。
- 2 現在は英文学部 (Faculty of English) ではあるが、慣例的な呼び方として、英文学科という呼称を用いることもある。
- 3 F. Brittain, *Arthur Quiller-Couch—A Biographical Study of Q* (Cambridge: Cambridge University Press, 1947), p. 149.
- 4 Basil Willey, "Introduction" to *The Astonishing History of Troy Town* (1888; rpt. London: Dent, 1963), p. viii.
- 5 Brittain は Q と ' ' をつけていない。ここでは Willey にしたがって引用以外は 'Q' とする。
- 6 多くの伝記作者がそうであるように, Brittain も 'Q' についてまことに好意的に書いている。それを E. M. W. Tillyard (*The Muse Unchained*) や F. R. Leavis (*Education and the University*) 等と比較すると, 'Q' の評価には大きなギャップがあるといえる。従って, Brittain の伝記は 'Q' の事実関係のみを重視して(単なる事実関係の既述には, この伝記の頁数を明記せず借用したい), 他の批評家の著作も参照しながら, 筆者なりに考察を進めたい。
- 7 Brittain, p. 3.
- 8 *Ibid.*, p. 3.
- 9 *Ibid.*, p. 22.
- 10 E. M. W. Tillyard, *The Muse Unchained* (London: Bowes & Bowes, 1958), p. 39.
- 11 F. R. Leavis (*English Literature in Our Time and the University—London, 1969*) は次のように述べている。
 His['Q's] conception of the new School was that making Aristotle's *Poetics* (in Butcher's or Bywater's translation) that handbook of critical thought, it should inculcate (and reward) good taste, good writing and decent manliness. The worst to be said about it is not that it gave no hint of any exploratory-creative energy that would be needed to justify the innovation and realize the implicit promise of the charter, but it represented the most dangerous energy that threatened the English Tripos in its first decade. This was the supremely confident 'Classical' tradition of Form, Latin-versifier's taste conventional externality and belles-lettres. (p. 13)
- 12 Tillyard, p. 83.
- 13 *Ibid.*, pp. 49-50.
- 14 Hugh Carey, *Mansfield Forbes and his Cambridge* (Cambridge: Cambridge University, 1984) は次のように述べている。

Q, as professor, was much more than a figure head—he was undoubtedly that—but he was disinclined

for the routine business of a department, which he deserted for his beloved Fowey as soon as he decently (or as some thought indecently) could. (p. 67)

- 15 M. C. Bradbrook (Ronald Hayman (ed.) *My Cambridge* (London: Robson Books, 1977)は次のように述べている。

Instead of one professor who spent much of his time at Fowey as Commodore of the Yacht Club there are now seven professors. . . . (p. 46)

- 16 Tillyard, p. 66.

- 17 Brittain, p. 87.

- 18 拙稿「The Cambridge English School—Cambridge 大学英文科(学部)の人間と研究をめぐって—(1)」,「鳥取大学教育学部研究報告」(人文・社会科学)第38巻 第1号, 1987年, 35頁を参照。

- 19 Tillyard, p. 118.

- 20 Brittain, p. 136.

- 21 *Ibid.*, p. 149.

- 22 *Ibid.*, p. 151.

- 23 原文は次の通り。

After breakfast he wrote a letter home: through fifty-four years of married life he had written home everyday whenever he was away. He then dealt with his ordinary correspondence and with literary work until lunch time. (Brittain, p. 153)

- 24 原文は次の通り。

Those who knew him personally will remember him as an original character, a humorist, an entertaining conversationalist, a charming and generous host, and a friend of all who turned to him in any kind of trouble. A far wider circle will remember him as a writer of beautiful, chaste English prose who . . . as author, critic and anthologist kindled in other a lively and discriminating love of English literature: and he will be remembered as a great Cornishman. (Brittain, p. 153)

- 25 使用したテキストは Sir Arthur Quiller-Couch, *The Astonishing History of Troy Town* (1888; rpt. London: Anthony Mott, 1983)である。引用頁については、この版の頁数を示す。

- 26 Sir Arthur Quiller-Couch and J. D. Wilson, eds., *As You Like It* ("The New Shakespeare") (Cambridge: Cambridge University Press, 1926), p. ix.

- 27 Sir Arthur Quiller-Couch and J. D. Wilson, eds., *The Merchant of Venice* ("The New Shakespeare") (Cambridge: Cambridge University Press, 1926), p. xviii.

- 28 Sir Arthur Quiller-Couch, *Shakespeare's Workmanship* (London: T. Fisher Unwin, 1918), p. 18.

- 29 Sir Arthur Quiller-Couch, *Studies in Literature* (Cambridge: Cambridge University Press, 1918), p. 97.

- 30 *Ibid.*, p. 112.

- 31 *Ibid.*, p. 112.

- 32 *Ibid.*, p. 27.

- 33 *Ibid.*, p. 29.

- 34 *Ibid.*, p. 40.

- 35 *Ibid.*, p. 40.

- 36 *Ibid.*, p. 46.

- 37 *Ibid.*, p. 46.

- 38 *Ibid.*, pp. 47-48.

- 39 Sir Arthur Quiller-Couch, *On the Art of Reading* (Cambridge: Cambridge University Press, 1924), p. v.

- 40 *Ibid.*, p. 10.

- 41 *Ibid.*, p. 12.

- 42 *Ibid.*, p. 13.

- 43 *Ibid.*, p. 15.

- 44 *Ibid.*, p. 16.

- 45 *Ibid.*, p. 17.
46 *Ibid.*, p. 48.
47 *Ibid.*, p. 50.
48 *Ibid.*, p. 50.
49 *Ibid.*, p. 51.
50 *Ibid.*, p. 51.
51 *Ibid.*, p. 51.
52 *Ibid.*, pp. 52-53.
53 *Ibid.*, p. 59.
54 *Ibid.*, p. 51.
55 *Ibid.*, p. 51.
56 *Ibid.*, p. 60.
57 *Ibid.*, p. 126.
58 *Ibid.*, p. 132.
59 *Ibid.*, p. 141.
60 *Ibid.*, p. 151.
61 *Ibid.*, p. 157.
62 *Ibid.*, p. 162.
63 *Ibid.*, p. 168.
64 *Ibid.*, p. 169.
65 *Ibid.*, p. 183.
66 Sir Arthur Quiller-Couch, *On the Art of Writing* (Cambridge: Cambridge University press, 1916), pp. vi-vii.
67 *Ibid.*, p. 8.
68 *Ibid.*, p. 8.
69 *Ibid.*, p. 9.
70 *Ibid.*, p. 12.
71 *Ibid.*, p. 12.
72 *Ibid.*, p. 12.
73 *Ibid.*, p. 15.
74 *Ibid.*, pp. 16-17.
75 *Ibid.*, p. 17.
76 Basil Willey, "Introduction" to *The Astonishing History of Troy Town* (1888; rpt. London: Dent, 1963), p. vii.
77 *Ibid.*, pp. vii-viii.
78 Sir Arthur Quiller-Couch, *Oxford Book of English Verse* (Oxford: Oxford University Press, 1900), p. ix.
79 Quiller-Couch, *Reading*, pp. 105-106.
80 Tillyard, p. 59.
81 Willey, "Introduction", p. v.

